



周年安定供給、人と環境にやさしい花作り…… 世界を見据え攻めの農業実践



福岡県八女市
JAふくおか八女
八女電照菊部会 部会長
中園 英治さん

福岡県八女市のJAふくおか八女・八女電照菊部会は、時代に対応した取り組みを続け、花き業界のトップランナーとしての地位を築いた生産者部会です。業務用の需要が拡大した昭和60年代に、気象災害に強い高度化施設の導入を進め、周年生産を確立。栽培技術の確立や種苗の安定供給、出荷規格の統一のための検査体制の整備など、生産者自らが役割分担をして、組織力を高めてきました。さらに、県試験場と連携して新品種を開発するとともに、新たな用途の提案を先導。産地間協調を提唱するなど、国際情勢を見据えた活動を展開しています。



●概要●

「菊」

JAふくおか八女は、福岡県南部に位置し、八女市を中心として筑後市、広川町、立花町、黒木町、星野村、矢部村の2市3町2村に広がっています。平均気温16度、年間降水量は1800ミリで、年間を通じて温暖で水に恵まれた地域です。土壌は八女地域の中央を流れる矢部川下流に開けた沖積地帯のため肥よく、水利条件も恵まれています。産地としての伝統は古く、JAふくおか八女八女電照菊部会は昭和31年に結成した「八女市花卉園芸組合」が前身です。平成2年に任意組合から農事組合法人に変更し、12年にJAふくおか八女の生産部会になりました。部会員数は181戸(平成18年度末)。

市場ニーズを先取り 周年栽培と安定供給へ

八女電照菊部会は、生産者個々の力を結集することで、均一で高品質な電照菊を生産する産地として飛躍しました。平成19年の販売額は40億円。「産地として50年以上続いているのは、先輩たちの努力と常に新しい販売戦略を考えて挑戦してきた結果だと思っています」と部会長の中園英治さんは胸を張ります。

つした施設は、昭和60年代から建設され始めました。菊の需要はこの時期に、家庭中心から葬儀などの業務中心に変化してきたからです。部会では、このような市場ニーズを先取りし、葬儀に必要な白で品質がそろった大量の輪菊を、周年で安定的に供給するため、ビニルハウスから高度化された施設に切り替えました。その結果、63年に4戸だった高度化施設の保有は、18年には132戸まで進みました。

主力品種は祭壇が際立つ花色の純白さ「花持ちの良さ」を強くアピールできる秋菊「神馬」を、夏菊では「優花」を選定。品

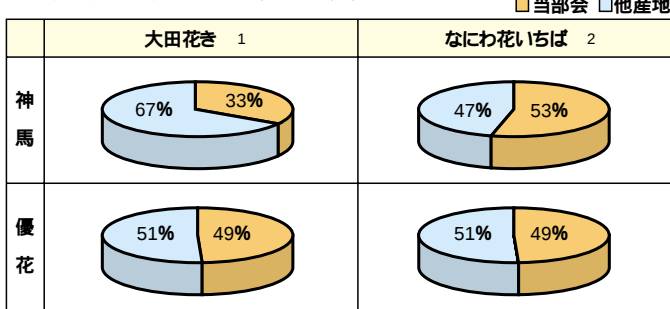


菊ハウスの深夜電照

います。

部会員による一次検査とJA

■主要卸売市場における神馬・優花のシェア



1 大田花き:日本最大の花き市場 2 なにわ花いちば:西日本最大の花き市場

職員による二次検査を行い、品質管理を徹底しながら、10～5月、神馬、6～9月は「優花」を安定的に出荷しています。

部会組織が時代変化に対応 若手・女性の力引き出す

変動する情勢に柔軟に対応できるよう、指導部と販売部、育苗センター部の3つの専門部をつくり、機能を分担しています。指導部は部会の技術革新の中核として毎月2回の定例会を実施し、生産管理技術の確立と向上を図ります。販売部は流通情報

をつかみ、分析し、有利販売につなげていきます。育苗センター部は品種の系統選別や特性の把握、無病苗の安定供給に取り組みます。「自分たちのことを他人任せにしない精神も持っている」(中園さん)ことが最大の強みです。

また、「部会の宝」と位置づけられる青年部は、40歳以下の部会員で組織。部員数は部会戸数全体の4割におよびます。青年部は毎月の勉強会や先進地研修を行い、新品種の開発や試験展示、新技術の実証・検証から産地に合った技術確立と課題解決

を行い、指導部にフィードバックしています。

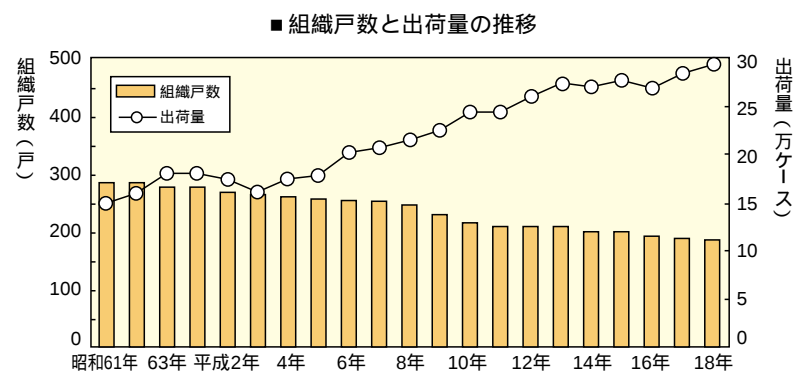
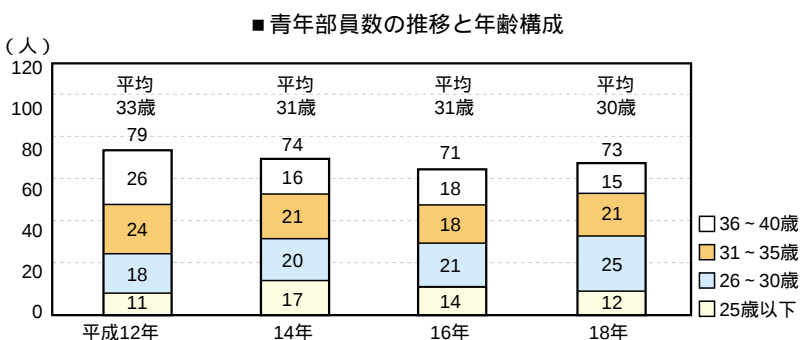
家族経営の中で女性を経理や労務管理を担う重要なパートナーです。高品質な菊を周年栽培するには多くの労働力が必要のため、農繁期などには雇用労働力を取り入れ、経営の安定と規模拡大につなげてきました。支部活動の研修会には夫婦で参加することや家族経営協定の締結を推進しています。



八女電照菊部会のメンバーたち



青年部の現地巡回



品質がそろった輪菊



雪姫



神馬(白)・美吉野(赤)・精興の秋(黄)



結婚式で白菊のブーケを使用

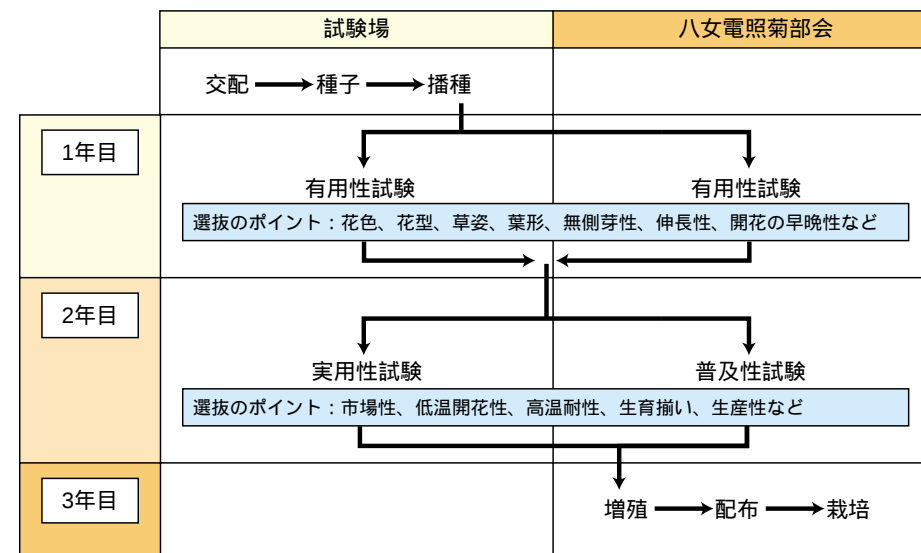


菊のディスプレイ

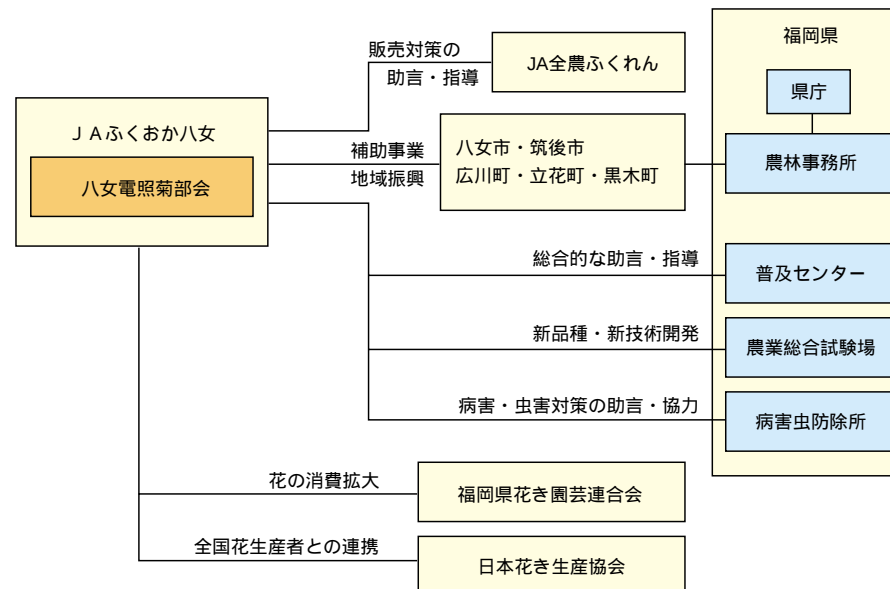


九州輪ギクサミット

■新品種開発のフロー図



■外部関係機関との関係



はのオリジナル品種を作ろうと、平成14年から新品種の開発に力を注いでいます。15年からは県試験場と連携して新品種の育成を進める体制を築きました。

「時代に合った品種を選ぶには、スピードが大切。八女電照菊部会は機動力、スピード力があるので、上がってくる情報量がある。」

格段が増えて助かります」と県普及センター。試験場などで育成された新品種は、3年後には部会員による試験栽培ができる段階にまで育てる体制を整えており、現在、「雪姫」を試作しています。

連携は県内だけでなく、国内の菊産地が海外産地

と戦えるよう団結し、挑戦を続けることが必要な時代になりました。産地間競争から「協調」へ転換するため、18年に九州輪ギクサミットを開きました。まず九州の白輪菊の品種統一に向けて、新品種の育成や生産方策の協調をはかっています。

併せて、結婚式での菊のブー

ケの提案やアレンジメント、ディスプレイでのイメージアップなど、新たな用途での需要拡大にも力を入れています。

環境にやさしい菊作り子どもへの「花育」も

花でも安全で信頼できるものを選ぶようになってほしい」と願い、13年から農薬の使用量を減らす取り組みを始めました。ハウスに防虫ネットを張って害虫の侵入を抑えることで、殺虫剤の使用を3割ほど減らしました。

稲・麦わらや牛ふんなどを入れた土づくりにも力を入れ始め、化学肥料を5割ほど削減しました。18年にはすべての部会員が県のエコファーマーを取得しました。181戸全戸が取得す

るのは、花き業界では先進的です。出荷箱にエコファーマーのマークを印刷するほか、主要な取引市場でエコファーマーが栽培している八女の菊の産地表示を実現し、積極的にPRしています。

オランダで開発された花き生産の環境認証プログラムMPSの研究にも取り組んでいます。

また、食育ならぬ「花育」に昭和56年から八女市内の小学校で取り組んでいます。当初は子どもたちが菊を育てて開花させるま

でを部会員が「菊先生」として支援するだけでしたが、開花したときに地域の人を招いて菊祭りを開くことが定例行事となり、子どもたちが調べた菊の歴史や特性などの発表や劇の披露などに発展しています。

菊作りを経験した子どもたち、32人が就農し、今度は「菊先生」として子どもたちに教えるようになっています。産地としてさらに花開くよう、取り組みを充実させていく予定です。

中央審査委員会・八木宏典委員長

1 八女電照菊部会の前身は八女市花卉園芸組合であるが、東京への販売担当駐在員の配置など、JAふくおかの八女と一体となった販売力強化を目的に、平成12年に部会組織として新たに編入したものである。

2 純白さと花持ちの良さを特徴とする「神馬」を秋菊に、また「優花」を夏菊に選定して、前者の10月5日出荷、後者の6月9日出荷による周年供給体制を確立し、業務用需要を中心とする品種戦略とブランドづくりを通じて、品質、出荷量ともに国内のトップブランド産地としての地位を築いてきた。

3 「人と環境にやさしい花づくり」をスローガンに、防虫ネット導入による減農薬と、有機質肥料の活用による化学肥料低減にも取り組み、全国の輪菊産地では初めての

部会員全員がエコファーマーの認証を取得している。また、県農業試験場との協力のもとに、交配から試験栽培までの期間を短縮した品種開発体制を構築し、すでに「雪姫」「夏日和」などオリジナル品種を開発するとともに、さらに低温開花性や伸長性などに優れた新品種の開発に取り組んでいる。

4 部会の経営主の平均年齢は若く、しかも青年部員も部会員の4割ほどを占めている。青年部は毎月の現地研修会や各種検定会、勉強会などを通じて、部会の将来の担い手をめざした活動を展開している。また、女性グループを中心に結婚式のブーケなど、多様な需要の新規開発に向けたイメージ戦略に取り組むとともに、地域の子どものための「花育」などにも積極的に取り組んでいる。

■エコファーマーの件数(平成18年度末)

	件数	備考
全	127,266	
国	883	全国の0.7%
うち	216	全国の花の約24%
うち福岡県の花	209	全国の花の約23%、福岡県の花の約97%
うち八女地域の花	181	全国の花の約20%、福岡県の花の約84%
うち八女電照菊部会	3,017	
うち福岡県		

(福岡県農政部農業技術課調べ)



青年部による花育